

Educo

No.41
2016年秋

ロバートキャンベルさん

日本文学研究者・東京大学大学院教授

巻頭インタビュー p.2



知っておきたい教育 NOW p.4
ようやく大きく変わる日本の英語教育
グローバル社会でリーダーシップを発揮できる
生徒の育成 ~SGH活動を通して~

きょういく見聞録 p.8
西郷・大久保を育んだ薩摩の「郷中教育」に学ぶ

地球となかよしトピックス p.10
音楽できらめく一伊達市復興支援一

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14
森を食べる植物~腐生植物 その暮らし

コラム p.15
PISAやTALIS調査から見える
日本の教育の現状と課題

ほっとな出会い p.16
奥野かるた店 会長

代表取締役

奥野伸夫さん
奥野誠子さん

しなやかな 感性をもって育つ

日本文学研究者
東京大学大学院教授

ロバート キャンベルさん

学ぶ喜び

私は研究者であり、教育者でもあります。私の家族にはそういう職に就いた人はいませんでした。私は大学に進学しましたが、生涯学び続けることは考えていなかったのです。でも、高校でよい先生との出会いがあり、学ぶことが面白くなりました。何かを学ぶことで自分が変わるのを実感する瞬間が、たくさんありました。知識の獲得はとても大事ですが、習得するだけではなく、学んで、昨日できなかったことができるようになる喜びや、新しい学びの扉を一つ一つ開けていく喜びを人と分かち合うことは、とても重要だと思います。

次の学習指導要領では「カリキュラムマネジメント」と「アクティブ・ラーニング」の二つがキーワードのように言われていますが、試験で優秀な成績をとること以上に、学ぶことを通して本来自分が何をしたいのかを発見することが大切です。それをきっかけに人と絆を作ったり、議論したり、時には対立もする喜びを若い時期から経験するのは、教育に必要な大事なことだと、自分の経験から思います。



「気づく」瞬間

東京大学駒場キャンパスには、いろいろな分野を研究している人たちがいるので、いつも、自分は何者かを相手に伝えるように説明します。人々に何かを伝え、他の人が自分とどう違う、どんな点で共感するのかに気づくことは、とても大切です。

東大では職員数の男女差はさほどありませんが、教員と学生は圧倒的に男性が多いのです。そういう環境に気づき、なぜ女性が少ないのか、どうすれば入学者がもっと多様な構成になるのかを考える必要があるかもしれません。国籍も含め、多様性の棚卸しを意識しなければ、他者との共存は始まり

ません。

日本では社会的マイノリティへの暴力などは欧米に比べ目立ちませんが、逆に「違いを見えないようにする力」があると思うのです。国籍やセクシュアリティなどの違いを自然に当事者が表すことができ、自分とは違う一面をもつ人たちがいることに気づき、どう関わっていくかを考えることが大切です。そういう意識を、社会として育んでいく必要があります。

他者と向き合う

中教審の「審議のまとめ」では、若い人々が義務教育の中で協調性をもって生き、自らのもつ力や情操などを肯定的にとらえ協調していく大切さ

PROFILE

ニューヨーク市生まれ。カリフォルニア大学バークレー校卒業 (B.A. 1981年)。ハーバード大学大学院東アジア言語文化学科博士課程修了、文学博士 (M.A. 1984, Ph.D. 1992年)。1985年に九州大学文学部研究生として来日。同学部専任講師 (1987年、国語国文学研究室)、国立・国文学研究資料館助教授 (1995年) を経て、2000年に東京大学大学院総合文化研究科助教授に就任 (比較文学比較文化コース [大学院]、学際日本文化論 [教養学部後期課程]、国文・漢文学部会 [同学部前期課程] 担当)。2007年から現職。
ウェブサイト
<http://robertcampbell.jp/bio.html>



を強調しています。それは結構なことだと思いますが、全体として「他者」とどのように向き合っていくのか？

今後、日本国籍ではない人たちが確実に増えます。義務教育を終えてから海外で仕事をしたり、留学する人も増えることを考えると、早い段階から他者との多様性を積極的に受け止め、「違い」とは何なのかについても、学習指導要領の中などに明記すべきではないかと思えます。「多様性」は素敵な言葉ですが、知的・身体的障がいのある人や、肌の色や性的指向が違う人が教室に現れた時、違いを見えなくして「みんな一緒だ」とするだけでは限界があります。例えばいじめの問題は、今の学級運営のままではなくなりません。それは教育現場での大きな問題の一つではないでしょうか。大学でどのような学生の総体を作るかなど、課題は多くありますが、大学の中でさまざまな配慮をし、いろいろな人たちがもつと

自由に議論できる場を作る余地はあらずです。

子どもたちの自発的探求のために

いろいろな職業の現場を見たり、校外から人を招いてプロジェクトを立ち上げたりすることは大事です。高校時代の私は、それが苦手でした。市立の進学校に通っていましたが、当時の私は一匹狼的であり部活などには参加せず、ダンスを習って舞台に出たり、校外に自分の居場所を見出していました。日本の部活動については賛否両論がありますけれど、アメリカにはない素晴らしい文化だと思えます。部活動を通じて、もつと社会との接面を作っていくことができるのではないのでしょうか。

私はいろいろな社会活動をしていますが、その中には中・高校生も参加できる活動もあります。例えば、「鎮守の森プロジェクト」（旧称・長城の森プロジェクト）という東北を中心とした取り組みがあります。百年後の防災林を作るため、秋にドングリを拾い、苗を作り、東日本大震災の時に津波で破壊された海岸線の周囲に植樹して

く活動です。この活動が、面白いのです。先日は明治神宮の森に伺いました。千年先までを想定して造られた人工の森で、秋になると森の木々からドングリが豪雨のように落ちてきます。神宮にお願ひして、東北での植樹用に植生が合うドングリをおすそ分けしていただいています。植樹祭やドングリ拾いなど、1〜2年かけて園芸の専門家と一緒に作業は本当に楽しいですし、とても勉強になります。

またある時は仙台のお寺の境内で約7万個のドングリを拾う活動もしました。近隣の子どもたちも参加しましたが、みんなで何かを達成する場に未成年者がいると、とてもいいのです。みんな元気になりますし、世代が上の人たちも「しつかりしなくては」という気持ちになりますから。

井上陽水さんが作詞した『海へ来なさい』という歌があります。子どもや若い人に語りかける、とても優しいバラードで、「魚に触れる様なしなやかな指を持ちなさい」という歌詞があります。自分と圧倒的な違いをもつ生き物に対して、ある種の畏怖の念をもつて接し、強くなやかな感覚をもつて育つことが、たぶんすべての基盤ではないかと思えます。そして他者

に触れた時にもしなやかに、そして自分の中心はぶれないけれど、相手に歩み寄ることが出来る。共振できる感覚と言葉をもつように育ってほしいなと思えます。心と言葉は、大事です。

学校の先生方は日々多くの公務に埋もれているような状況で、本来の仕事以外のことも忙しく働いている方は多いと思います。その中で、若い生徒に何かを学びとってもらい、先生方に「授ける」ことの喜びや達成感を感じてもらい、それが少しでも周りに広がっていくように、これからも頑張っていたきたいと思います。自分たちが頑張ってきたことが本当に「違い」を生み出しているのか不安に思われることもあると思います。私は、大学3、4年生の学部に入ってくる学生とは一対一でがっちりつきあうので、その時点で学生たちに、主専攻についてや、どんなきっかけで研究をしているのかなど、話をたくさん聞きます。その時に「なるほど！」とわかるんです。中学校や高校で勉強したことや、学校の中で提供された学びや出会った先生などが、いかに学生たちの現在の研究や闘志のベースになっているかというところが、それを先生方にお伝えしたいですね。そして、エールを送りたいです。

ようやく大きく変わる 日本の英語教育



立教大学 教授
松本 茂

いよいよ変わる

なかなか成果があがっていないと批判されてきた日本の英語教育。事実、2015年度に高校3年次生を対象に行われた英語力調査の結果では、①CEFR B1レベルに達している生徒は少数であること、②話す・書くといった発信力がかなり低い、という結果が出た（CEFRと資格試験との関係については表を参照）。

しかし、ここに来て、日本の英語教育が「いよいよ変わる」と実感できる状況になってきた。2020年以降いよいよ大きく改善されるという手応えが感じられるのだ。そう感じさせるのは、主に、①学習指導要領の改訂、②英語4技能テストの活用推進、③小学

校の英語教育の充実、④大学教育の国際化、といった複合的な要素があるからである。

学習指導要領の改訂

学習指導要領が約10年ぶりに改訂されることになり、2020年度に小学校で全面实施される。また、翌2021年度から中学校で全面实施、2022年度からは高等学校で1年次から順次実施される。今回の学習指導要領の改訂では「学びに向かう力、人間性等」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」の3本柱がベースとなる。現行の学習指導要領に基づいて推進してきたさまざまな英語教育の改善策が、この枠組みにそって整理、発展される。児童生徒が自律的・主体的

に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけ、言語の働きや役割に関する知識・技能を高め、情報や意見を表現できる力を伸ばすことが可能な英語教育の実現に向かう。

英語で「〜ができる」といったCanDoリストが、次期学習指導要領の「外国語」に盛り込まれる可能性が大きい。国が校種ごと、年次ごとに「〜ができる」という指標形式の目標を学習指導要領に盛り込むことは、学習指導要領の法的拘束力を考えても大きな影響力を持つ。現在の教科書検定制度のもとでは、教科書会社の中には抜け道を探し、旧態依然とした指導をする高校教員が欲する内容の教科書を発行しているケースもある。しかし、指標形式の目標が明示されれば、これ

に一定の歯止めがかかり、学習指導要領の趣旨にそった内容の教科書が出版されることが期待される。また、各校が国の指標を参照しつつ、自校の実情により合ったCanDoリストを作成、活用することで、各校の英語科教員が一つのチームとして機能して英語教育を改善できるはずである。

英語4技能テストの

活用推進

立教大学は、全学部全学科を対象に民間の4技能英語資格・検定試験を活用した一般入試を2016年2月に実施することを全国に先駆けて2014年12月に発表した。立教の場合、CEFRのB1レベル以上のスコアや級を取得していることを証明する資料を提出すれば出願できるという入試で、「グローバル方式」という名称である。

立教と同じく民間の4技能テストを活用した入試を実施、あるいは実施する計画を発表した大学が急増している。活用の仕方については立教のように「出願方式」のほかに、「みなし満点方式」「加点方式」などがある。また、基準となる点数（級）についても、B1レベルを下限にするのではなく、それよりも上位の点数を基準にしている

各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	GTEC for STUDENTS	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)				8.5-9.0					
C1	CAE (180-199)	1級 (2630-3400)	1400		7.0-8.0	400	800	95-120		1305-1390 L&R 945* S&W 360*
B2	FCE (160-179)	準1級 (2304-3000)	1250-1399	980 L&R&W 810	5.5-6.5	334-399	600-795	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785* S&W 310*
B1	PET (140-159)	2級 (1980-2600)	1000-1749	815-979 L&R&W 675-809	4.0-5.0	226-333	420-595	42-71	322-340	790-1090 L&R 550* S&W 240*
A2	KET (120-139)	準2級 (1284-1800)	700-999	565-814 L&R&W 485-674	3.0	150-225	235-415		300-321	385-785 L&R 225* S&W 160*
A1		3級-5級 (419-1650)	-699	-564 L&R&W -484	2.0					200-380 L&R 120* S&W 80*

英検：日本英語検定協会 <http://www.eiken.or.jp/forteachers/data/cefr/>
http://www.eiken.or.jp/association/association/info/2015/pdf/20151218_pressrelease_CSE2.pdf
 TOEFL：米国ETS <http://www.ets.org/Media/Research/pdf/15-06.pdf>
 IELTS：ブリティッシュ・カウンシル（および日本英語検定協会）資料より
 TEAP：第1回 英語力の評価及び入試における外部試験活用に関する検討会 吉田研作教授資料より
 Cambridge English（ケンブリッジ英検）：ケンブリッジ大学英語検定機構 <http://www.cambridgeenglish.org/exams-and-qualifications/cefr/cefr-exams/>
<http://www.cambridgeenglish.org/exams/cambridge-english-scale/>

GTEC：ペネセコーホールディングによる資料より
 [L&R&W]の記載が無い数値が4技能の合計点
 TOEIC：IIBC <http://www.toeic.or.jp/toeic/about/result.html>
 [L&R]または[S&W]の記載が無い数値が4技能の合計点

※各試験団体の公表資料より文部科学省において作成

ケースもある。
 また、立教でもそうだが、AO入試、指定校推薦、付属校（関係校）からの入学などにも民間の4技能テストを活用する大学が増えている。AO入試などでは、英語力の高い受験生を確保するために、立教大学でもそうだが、一般入試より高い英語レベルを設定しているケースもある。

活用するテストについては、「英語4技能試験情報サイト」に掲載され

ているテストのうち、各大学がそれぞれの基準・理由で選択している。例えば立教のようにほぼすべての民間のテストを採用しているケースから、上智大学のようにTEAPのみ、としているケースまでさまざまである。そして、この流れに追い風になるのが、センター試験に代わるテストとして2020年度から実施が予定されている「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」である。英語については、4技能テストの実施がほぼ決まっており、現在、どのような体制で実施するかが検討されている。民間のテスト実施機関に協力を仰ぐことも一つの選択肢になつて²⁾いる。

わることが期待されている。予備校業界の動きは早い。いわゆる難関大学に多くの生徒を送り込んでくる予備校・塾では、大学入学希望者学力評価テスト世代となる現在中学2年生のクラスからスピーキングやライティングの指導に力を入れ始めている。すべて英語で授業を行っている予備校もあるくらいだ。

小学校英語の充実

現在5・6年次生対象である「外国語活動」が、「外国語（英語）」という教科になることが決まった。また、「外国語活動」は3・4年次に前倒しになる。これまでの「活動」では、聞く・話す活動に限られているケースがほとんどだったが、「教科」となることで、読む・書く活動を含む4領域の指導となる。

ICT教材をどれほど利用できるのか、といった課題も多い。このような課題があり、小学校教員の負担が増えることも懸念されるが、日本の子どもたちの英語力向上という観点から見れば、小学校における英語教育強化の動きは歓迎すべき施策である。とくに英語で話す・書くといった発信力を育成するには時間がかかる。小学校3年次から聞く・話す活動を行い、5年次からは4技能の力を育てることにより、児童生徒の生涯英語学習の時間数が増え、中学のスタート時点の指導内容が高度化し、最終的には高校卒業時点の英語力があがることが期待される。

いずれにしても、「大学入試が変わらなければ高校の英語教育は変わらない」と言われ続けしてきた状況に、入試でのこの4技能テストの活用は風穴をあけることになるであろう。依然として、高校の授業では、リーディング・文法演習が中心で、生徒が活動する時間が少ないケースが散見されるが、これからは生徒が主体となつて4技能統合型の活動（例 英文を読んだ上でその内容について英語でサマリーを書き、英語でディスカッションする）を行う授業へと変

ただいくつか課題もある。教科としての「外国語（英語）」は週2コマ展開になることになったが、他の教科の時間数を減らさないため、どのように授業時間を捻出するかは各校のカリキュラム・マネジメントにまかされることになった。朝活の時間など、10〜15分間の細切れで指導する「モジュール方式」の導入も検討せざるをえない。また、専科教員をどれだけ活用するのか、ALTの増員は可能なのか、

下（小学校における英語教育）から、そして上（大学入試）から大きく変わること、中学・高校の英語教育が4技能をバランスよく育成する内容に大きく改善される流れができてつつあるのは間違いない。今こそ、オールジャパんで英語教育の改善に臨みたいものである。

1) 実用英語検定（英検）については、2015年度までは2級（CEFR B1レベル）は3技能テストだったため、準1級（B2レベル）を出願基準とした。2017年2月に実施する入試については、2016年度の英検2級を可とする。

2) 「読売新聞」8/20朝刊34面「英語「話す」に民間試験 大学新テスト文科省が活用案」を参照。

グローバル社会で リーダーシップを 発揮できる生徒の育成 〜SGH活動を通して〜



静岡県立三島北高等学校 教諭
SGH 推進室長
川村 陽一

はじめに

平成26年、文部科学省は全国56校をスーパーグローバルハイスクール「SGH」に指定した。グローバルリーダー育成に資する教育を推進することがねらいだ。新しい学力観に伴い、グローバル化の進む現在、それに対応した資質能力が求められている。グローバル社会で生徒たちが将来リーダーシップを発揮するために、教員は(1)無限の可能性を持つ生徒の主体性を育て、(2)新しい学力観に基づいた授業改善への工夫をし、(3)点数だけによら

ない多面的な評価方法を構築し、(4)キャリア教育に基づいた進路指導(スーパーグローバル大学「SGU」との連携)の実践が求められる。

高校生に身につけさせたい資質能力は、①グローバルな視点で社会課題を考える力、②教科横断的な知識や深い教養、③論理的思考力と批判的思考力、④日本語や英語によるコミュニケーション能力、⑤主体的に取り組もうとするリーダーシップや協働的に活動に取り組み課題解決力である。これらは現代社会が求める能力であり、入試改革を進める大学への進

学や就職後も大いに役立つものである。

三島北高校のSGH

本校では「水」をテーマに課題研究を実施している。アクティブラーニングを取り入れ、1年次にLocal Water Issues「LWI」、国内の水問題」、2年次にGlobal Water Issues「GWI：世界の水問題」に取り組み。3年次にはSGHを通じて学んだことから関心のある課題を選び、英語でまとめる。入学後すぐに初期指導でLWIの大枠を掴む。授業は予定表に従い進められる。生徒

たちの目指すゴールは「英語によるポスターセッション」である。日本語でレジュメとポスターを作成、英語にしていく。GWIでは、最初に個人探究を行い英文エッセイに取り組み。レジュメも英語で書く。ゴールは同じだが、大きな違いは「英語による質疑応答」までを目指している点である。

英語を課題研究の

プロセスにどのよう

取り入れるべきか

「最初にGWIを」という指摘がある。理由は「世界に比べ、日本には水問題が比較的少ない。課題として捉えづらく、問題意識が低くなる」「世界の水問題を扱えば、最初から英語で探究できる」「英語で考え、まとめていくことが重要だ」。しかし、生徒の実態を考えると、まずは日本語で論理構造を固めることが大切である。そこで、1年次LWIは日本語から入り、論理的な表現方法を正しく習得した後英語へ移行する。2年次GWIは最初から英

語エッセイ、英語ポスターへと挑戦する。しかし、英語を課題研究にどう取り入れていくかは今後も検討すべき課題である。

重視される英語力

グローバル社会で不可欠なツールとしての英語 4 技能を効果的に身につける必要がある。プレゼンテーションや英文エッセイを S G H の授業にも取り込んでいる。また、海外研修や海外進学など国際交流を希望する生徒たちのために「国際交流室」を設けている。主にディベート活動中心に取り組んでおり、全国高校生英語ディベート大会出場に向けて練習に励んでいる。G W I では生徒の英語力向上のため、複数の外国人指導教員から支援を受けている。常駐 A L T に加えて、県教委と県総合教育センターの 2 人の A L T が授業に参加し、ショープレゼンや個別の助言を行っている。また、英語力強化のため I S A による「エンパワーメントプログラム」研修を夏季休業中に

本校で実施する。

英語授業の変化

教員が英語を用いることはもちろんだが、生徒が授業で英語を発する時間をいかに増やすかが重要である。発信力を鍛えるには input 量を増やすとともに output 回数を増やす必要がある。授業の導入やまとめなどで topic を与え、ペアで発問を投げかけ、回答には必ず根拠を添える練習をさせるなどの工夫をし、英語を話す機会や考える機会を数多く設けるようにしている。S G H 開始に伴い A L T とのチームティーチング(T T T)でも変化があった。1 つは、1 年次よりエッセイライティングの練習を始めたことだ。論理的思考力を養う上で有効な手立てであるが、比較的身近な内容で 1 年間練習を積むことで 2 年次の G W I での英文エッセイにつなげたい。また、英語ポスター作成方法やプレゼン方法についても T T の授業時に実施するようになった。

グローバルリーダー育成事業(海外研修派遣・海外フィールドワーク)

1、2 年生希望者で構成する海外研修は、年間を通じ事前・事後研修を行う。英語中心に作業を進め、成果発表会などでは英語で発表する。今年にはベトナム班(V 班)、シンガポール班(S 班)が一緒に研修を実施。彼らはそのノウハウを L W I、G W I で各クラスに還元しており、まさに S G H のリーダー的役割を担っている。一昨年はシンガポール大学で水問題の講義を受け、現地高校でプレゼンやディスカッションを行うなど英語漬けの 5 日間を過ごした。昨年はベトナムで同内容の研修を行い、在日本国大使館へ表敬訪問も実施した。

今年もベトナムへ生徒 13 名を派遣する。水資源大学での講義受講、国立 Chu Van An 高校で水問題のプレゼンや授業参加に加え、調査船を借りてハロン湾での現地調査を J I C A 専門家の協力で

実施する。連携する海外大学や高校とは今後も継続的交流を続けていきたい。

また、修学旅行にも S G H 色を持たせている。多くの学校で実施する業者主催の現地大学生との交流に留まらず、独自に現地高校や大学、企業などと連携を図り、プレゼンやディスカッション(海外研修 S 班)、講演受講などを行う。

終わりに

プレゼン、エッセイ、ディベートは英語による発信力を高める有効な手段であることは間違いない。ただし、最も大切なことは、伝えたいものを持つているかどうかである。伝えたいもの「自分の意見」をしつかり持てる能力の育成こそが S G H 活動の最たるものであると考えている。

●静岡県立三島北高等学校
〒411-0033

静岡県三島市文教町 1-3-18

●静岡県三島北高等学校 S G H 特設サイト

<http://mshimakita-h.ed.jp>

まく生かして人材育成を図ったのが藩主島津斉彬であった。斉彬は「人心一和」「挙藩一致」の精神を強調し、新しい学問や技術導入の重要性を説き各所に留学生を派遣、「集成館事業」という近代的産業の育成・充実を図ったのである。その「集成館事業」は今日「世界遺産」となった。

先人に学ぶ活動の推進

郷中教育は、藩校「造士館」が設立されてからは、それを補完する形で発展していったが、残念なことに明治10年の西南戦争によって、斉彬が最も大切としてきた「人心一和」の精神が失われ、伝統の「郷中教育」も衰退の道をたどることになった。西南戦争後、各地に郷中の精神や活動を受け継いだ「健児の舎（学舎）」が生まれたが、太平洋戦争後は、学校教育の充実発展に伴い情報化、部活動、塾通いなど社会的変化や平板化が進み、郷中教育の精神や特色がうすれてきた。しかし、そうした傾向にはあっても、なおかつ鹿児島の郷土に関する愛着心は高く、最近では学校や地域での伝統行事、郷中教育への関心も高まり、「先人に学ぶ」各種の行事や学習活動が活発に行われるようになった。

郷中教育をはじめ、薩摩人の人間教育の根本教本となった島津忠良（日新）の47首の「日新公いろは歌」は、「人としての生き方」を説いたもので、当時大人から子どもまで、男女を問わず暗唱し、家庭教育をはじめ日常生活の糧として民衆にまで広がった。今でも児童生徒による「日新公いろは歌かるた大会」なども開催されている。

郷中教育の教えそのものを「校訓」として掲げている学校もあり、城山登山や鹿児島・桜島間の「鹿児島湾横断遠泳」、薩摩独特の剣法「野太刀自顕流」など、伝統的な「山坂達者」活動を積極的に学校教

育に取り入れ、連帯感・成就感を体得させる学校も増えてきている。また、偉人の武功・辛苦を称え偲ぶ「妙円寺参り」、「西郷どんの遠行」など、地域行事や伝統行事に積極的に参加する気運も高まってきている。

学校教育活動と直結した事業の推進

鹿児島市の歴史資料館である「維新ふるさと館」においても特に学校教育との連携を重視し、学習活動に役立つ展示を工夫してきた。特に、地階維新体感ホールでは、西郷、大久保、坂本龍馬、勝海舟など7体の等身大ロボットを登場させ、音や光、映像などハイテク技術を駆使して明治維新を体感することができる。また、教師を対象とした「教員歴史講座」、「銅像に学ぶ親子講座」、「PTA研修講座」、「社会科研究作品展」、「西郷隆盛をしのぶ書道展」、「夏休み学習相談」のほか、学校へ直接出かけての「出前講座」などを実施しており、今後も学校と連携し、あらゆる学習支援活動を積極的に推進していく所存である。



いにしへの道を聞かなくても唱へても
わか行ひにせすは甲斐を
とかありて人を切るとも軽くすな
いかすかたをもたはひとつなり
もろもろの國やところの政道ハ
人にまつよく教へならハセ

西郷・大久保を育んだ薩摩の「郷中教育」に学ぶ ごじゅう

平成30年に明治維新150年を迎える。薩摩が明治維新で中心的役割を果たせた理由の一つに「人材の育成」が挙げられる。薩摩には「人を以て城となす」との教えがあり、国を守るのは「城」ではなく「人」であるとの考えから、特に人材育成には力を入れてきた。古くから学問が盛んで、中国の儒学も、日本においては薩摩から広がっていったと言われている。それ故、幕末にみられるような義に厚く勇猛果敢で連帯感の強い実直な人材が、薩摩から多く輩出された。こうした人材育成の基盤となったのが、先輩が後輩を教え導く薩摩独特の「郷中教育」であった。幕末、西郷・大久保などの優れたリーダーを中心に、「挙藩一致」の精神をもって、維新回天の業を成し得たのも、ひとえにこの「郷中教育」によるところが大であった。そうした薩摩の「郷中教育」とはいかなるものであったのか、そして、現在の教育にどう生かされているのか紹介したい。



鹿児島県鹿児島市 維新ふるさと館 特別顧問 福田 賢治

郷中教育の起こり

郷中教育の起こりは朝鮮出兵がきっかけであった。豊臣秀吉が朝鮮出兵を大名に命じたとき、薩摩も1万人余りが出兵、そのとき領地に残ったのが女性と老人、そして青少年であったことから、風紀の乱れを心配した留守居役の新納忠元（にいろただもと）らが、「二才咄格式定目（にせばなしかくしきじょうもく）」なる掟を定め、地域（郷）ごとに先輩が後輩を教え導く制度を作ったのがその始まりである。

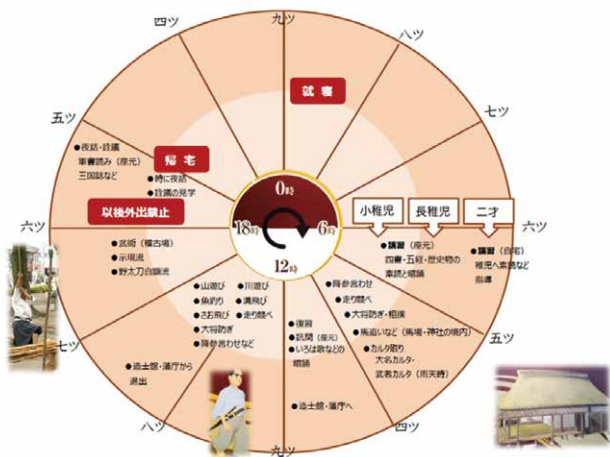
「教えるとは学ぶことなり」を 実践体得する教育

郷中教育は、5歳から結婚するまでの間活動するもので、いかなる問題もリーダーの「二才頭」を中心に、青少年自らが徹底した話し合いによって運営・解決するという純粹に自治的青少年教育であった。毎朝、明け六つ（6時）になると「座元」と言われる近所の先輩の家に集まり、四書五経や軍記物を中

心に学び、以後、手習いや算術、詮議、行事など、徳育、訓育、体育、遊びに至るまで、家庭生活以外のすべての面倒を郷中の先輩が指導者となって行った。先輩は後輩の模範となり教師役であることから、薩摩では特に「長幼の序」が重んじられ、礼儀や言葉使いなど厳しくしつけられた。長稚児（11～14、5歳）が小稚児（5～10歳）に教える時間も設けられ、先輩は「負けるな」「嘘を言うな」「弱いものをいじめな」という郷中の教えを集団の年長者自らが「教えるとは学ぶことなり」を実践体得し、後輩を指導することが求められた。特に、「弱いものをいじめな」という教えは、薩摩武士の重要な教えの一つで、「戦うときは徹底して戦うが、戦い終われば敵も味方もない」として、「降服した将兵を辱めてはならない」と厳しく教えられた。幕末における江戸城無血開城、山形の庄内藩降服や函館戦争での榎本武揚助命など、薩摩は降服した者への処分も、寛大さと礼儀を以て対処したのであった。

寺子屋のなかった薩摩

こうした薩摩独特の教育が発達した背景には、薩摩が「郷中教育」による義や誠を重んずる実践第一の武士社会であったことが挙げられる。薩摩は26%と4人に1人が武士であり、郷中教育は江戸時代に徐々に普及定着していったことから、他所でみられる「寺子屋」なるものは薩摩にはほとんどなく、地方武士は「郷土」として農業も許されていたため、質実剛健の武士の気風は地方の末端にまで浸透、他藩にはみられないほどの連帯・結束感が生まれていた。こうした切磋琢磨し連帯する薩摩の気風をう





▲演奏会本番。指揮は東京藝術大学の山本正治教授。「音楽の素晴らしさの一つに、演奏する側と聴く側、どちらも感動をもつことができることがある」と演奏会プログラムに書かれています。

福島県伊達市「伊達ジュニア ウィンドオーケストラ」

音楽できらめくー伊達市復興支援ー

福島県伊達市では、平成24年から「伊達市きらめき事業」の一環として、音楽による復興支援を行っています。東京藝術大学の山本正治教授が提案してくださったのをきっかけに、市内の伊達、梁川、松陽、桃陵、霊山、月館の6中学校の吹奏楽部で構成された「伊達ジュニアウィンドオーケストラ」と、「東京藝大ウィンドオーケストラ」の合同演奏会が始まりました。音楽の素晴らしさや奥深さ、そして技術を極める厳しさなどを学び、音楽を通して子どもたちが成長し、きらめいていくことを願う取り組みをご紹介します。

子どもたちの笑顔を取り戻すために

「音楽の力で、東日本大震災で被災した子どもたちの笑顔を取り戻したい」——伊達市吹奏楽きらめき事業は、この思いから始まりました。東京藝術大学の山本正治教授から「合同演奏会」のお話をいただき、演奏会を目標とした練習のために山本先生と藝大の学生さんたちが、伊達市に来てくださることになったのです。伊達中学校の鈴木昭夫校長先生は「東京藝術大学の先生による吹奏楽コンクールに参加する各吹奏楽部の訪問指導が今年も6月～8月に行われました。体育館などでの練習

は暑くて大変でしたが、コンクール演奏曲の練習が行われ、素晴らしい演奏に仕上がりました。」とおっしゃいます。

音楽による復興支援

市の教育委員会教育部学校教育課指導係の渡邊かおり主幹兼指導主事は、「この取り組みは、音楽を愛する方々の夢が原動力となり、皆の力が総結集して運営されています。練習を重ね、回を追うごとに子どもたちの演奏技術も豊かな心情も高まっています。」とおっしゃいます。

「最近では地元の楽団や合唱団など一般の方々の参加も増え、『きらめき事



▲藝大生との出会い。開催前日にご挨拶と自己紹介による顔合わせがありました。

▼伊達市の6つの中学校吹奏楽部と東京藝大ウィンドオーケストラが合同で演奏します。他にも、伊達小学校や保原高等学校、梁川交響吹奏楽団、伊達市楽友協会も友情出演します。アンコールでは、出演者と会場の皆さんと一緒に「ふるさと」を合唱しました。会場内に明るい歌声が響きます。



▲公演前のレッスンでは、子どもたちが「緊張しました。でも、難しかったことができるようになりました!」「奏法を教えてもらってよかったです」など、上達する喜びを先生方や藝大生さんに伝えていました。

深まる絆

業のおかげ」と言ってくださる方もいらっしやいます」「市民の皆さんの応援のおかげで、ここまで続いてきました。演奏のほかに、合唱など取り組みの裾野が広がっています。そのきっかけが、吹奏楽なのです」と梁川中学校の村上亮教頭先生は話されます。

吹奏楽公演を通して協働する喜びに気づき、地域の人々がつながり、子どもも大人も元気になれる「伊達ジュニアウィンドオーケストラ」の取り組みです。心に響く音楽活動により、人々の絆はさらに深まります。



全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

本校は、平成15年以来、14年にわたり、文部科学省の研究開発校として、町内の小中高校とともに、小中高一貫教育の教育課程に関する研究と実践に携わってきました。

特に、研究指定の5期目を迎えた平成27年からは、『地球コミュニケーション』（外国語・国際理解）と『新地球学』（環境）の研究開発を進めるとともに、認定子ども園の5歳児を含めた『1-4-4-4制』の新しい教育課程の研究にも取り組んでいます。この分野では、小学校入学前のアプローチカリキュラムや就学当初のスタートカリキュラムの開発・実践を進めるとともに、あわせて、小学5年生と中学1年生、小学6年生と中学2年生による小中連携の授業にも、『地球コミュニケーション』を中心に通年で取り組んでいます。

現在、グローバル社会の本格的な到来を迎え、外国語・国際理解教育としての『地球コミュニケーション』の意義は益々大きなものになり、児童は、姉妹都市のカナダ・ストニブレイン町との交流などの場を通して、実践力・活用の向上を図っています。

また、世界各地で注目されているESDの考え方や環境教育・防災教育の重要性を反映させた『新地球学』では、学校の周りの動植物にはじまり、然別湖火山群の自然環境までの四季折々を通じた数々の体験学習が、エネルギー問題や自然環境の保全といった、次代を担う地球市民としての感覚を身につける絶好のフィールドになっています。

本校では、平成28年9月15日の鹿追町幼小中高一貫教育研究大会の折に、中学年の『新地球学』と幼小連携による『地球コミュニケーション』を公開いたしました。

興味のある方は資料等をお問い合わせください。



北海道

国際理解教育とESDの新しい試み 〜鹿追の実践〜

北海道河東郡鹿追町立鹿追小学校 校長 梶原 源基

南から



平成26年4月、横浜市立いちよう小学校と飯田北小学校が児童数減少に伴い統合、飯田北いちよう小学校が開校しました。校区内の県営上飯田いちよう団地は、20年以上前からインドシナ難民の入居が進み、その後、中国からの帰国者をはじめ諸外国の方々が集住するようになり、現在、288名の本校児童の約7割がいちよう団地から通学しています。

平成28年7月現在、全児童のうち156名（約54%）の外国に関係ある児童が在籍しています。多くの児童は日本で生まれ育ち、不自由なく日常会話ができますが、学習内容を理解し、意見を的確に伝えることが苦手な児童もあり、基礎学力定着にも課題を感じています。そこで本校では指導者の配置を工夫し、非常勤職員やボランティアなどを活用、日本人を含む全児童に細やかな指導ができる少人数指導体制を整えています。国語と算数では、全学年、児童の日本語

力と教科習熟度に応じて4〜5グループで少人数学習を行うほか、ベトナム語や中国語で学習支援ができる非常勤講師や大学生、ボランティアと協働して母語依存度が高い児童への学習、さらに保護者や児童が慣れ親しんだ言葉や文化に誇りを持ち、国籍やルーツの違いを尊重し合えるよう、運動会などさまざまな学校行事や日々の授業づくり・校内環境づくりにも積極的に取り組んでいます。平成25年度からはベトナムにルーツをもつ児童を対象にベトナム語母語保持教室を立ち上げ、歌や踊りを通じた母文化伝承にも取り組んでいます。「日本人を含めた全ての児童の幸せなこれからのを願う」。全職員に共有された思いが、本校の少人数学習や多文化共生の取り組みを支え、一人ひとりの児童を温かく見守り、育てています。



神奈川県

多文化共生の学校づくりを目指して 〜「心つながり 笑顔ひろがり 世界へはばたく」〜

横浜市立飯田北いちよう小学校 校長 宮澤 千澄

兵庫

主体的・協働的な学びをめざして 〜岩園型アクティブ・ラーニングの取り組み〜

兵庫県芦屋市立岩園小学校 校長 伊田 義信

新 学習指導要領に関して、年内に中教審「答申」が出され、年度内には「改訂」の全容が明らかになります。本校では、変化も見据え、今年度から岩園型アクティブ・ラーニング（AL）に取り組み始めました。その一端を紹介します。

1 岩園型ALに着手

本校の子どもの実態と時代の要請を考え、本研究に取り組むこととしました。「岩園型」と付けているのは、ALを「自ら考え、みんなで学ぶ」と共通理解したことからです。研究にあたって、元文部科学省教科調査官で現在は京都女子大学大学院教授の井上一郎先生を総合講師としてお招きし、授業研究を中心に研究の進め方も含めて指導いただいています。

2 読書活動とつないで

兵庫県教育委員会の「読書活動推進事業」の研究指定を受けて2年目。AL型授業をベースとして、読解や読書に関わる言語活動の中で、①重点的に指導する表現様式を絞って単元を展開すること②いわゆる「図書」の概念にとらわれない多様なテキストを活用することの2点に焦点を定めて取り組んでいます。また、校内に図書の本や図書に関する掲示があふれる環境整備も行っています。

3 研究発表会

平成29年2月16日（木）には、「主体的・協働的な学びをめざして」をテーマとして研究発表会を行います。一緒に就いたばかりの拙い研究ですが、ご指導・ご助言いただきたくご案内いたします。

詳しくは、本校ホームページで。

URL : <http://edu-ashiya.ed.jp/iwazjs/>



広島

「グローバル化する21世紀の社会を生き抜くための 新しい教育モデルの構築」

府中市立第一中学校 校長 小寺 和宏

広 島県では「グローバル化する21世紀の社会を生き抜くための新しい教育モデルの構築」のため、県教育委員会が平成26年12月に「広島版『学びの変革』アクション・プラン」を策定し、課題発見・解決力、創造力、コミュニケーション能力などの児童・生徒のコンピテンシー向上を目指した取り組みを推進しています。

本校では平成27年度より「学びの変革」パイロット校事業の指定を受け、「グローバル人材育成のためのプログラム開発～『中におけるコンピテンシー』育成のための『すべ（アイテム、以下同）』について～」をテーマに研究・実践を行っています。コンピテンシーを「教科等を横断する汎用的なスキル（能力）」と定義し、問題解決、自律的活動、コミュニケーション、論理的思考の4つの能力育成による人格形成等をめざしています。これらは構造化・意識化がまだ十分ではないため、「すべ」（コンピテンシー育成のための手段等）を切り口に、授業でいかにコンピテンシーを育成していくか、授業での実践を通して検証中です。例えばコミュニケーション能力育成のための「すべ」の1つとして「修正」に取り組んでいます。他の人の考えは謙虚にとり入れ、自分の間違いは訂正することが重要なため、個人思考をノートに記述する際に集団思考で友達の考え等を聞き、必要ならば修正して個人思考を深める取り組みです。本年

度は全ての先生が単元開発を行い、日頃の授業実践でどのような「すべ」が有効か検証しています。コンピテンシー育成の取り組みにより教科等の本質や知識・技能及び思考力・判断力・表現力等について改めて研究を深め、コンピテンシーの構造化・意識化に挑戦したいと考えています。



森を食べる植物～腐生植物 そのくらし

東京大学大学院理学系研究科教授 塚谷 裕一

植物というと、陽の光を浴び、二酸化炭素と水から炭水化物を作り、酸素を放出する生き物というイメージが強い。もちろん、そういう植物が大半なのではあるが、実はそれとはだいぶ違う生活様式を持つものもある。ここでご紹介する腐生植物は、まさにその典型。森を食べて暮らす植物たちである（図1-1…タヌキノシヨクダイ）。

そのカビやキノコは、どこから栄養をとっているかといえば、これは森からである。

植物のくせに森を食べるといのはピンとこないだろう。一から説明すると、彼ら腐生植物は、光合成をしない代わりに根でカビやキノコのような菌類の菌糸から栄養を奪って暮らしている。そのため、野外で見つかる場合は、しばしば、いかにもカビやキノコが生えそうなところであることが多い。これが災いして、腐生植物は長いこと、動物や植物の遺体を分解して暮らしていると誤解されてきた。「腐生」という言葉が頭についているのは、まさにこの誤解からだ。しかし腐生植物たちは、カビやキノコと同じ暮らしをしているわけではない。カビやキノコを標的にして、彼らから栄養を横取りしているのである。そのため最近では、腐生植物という言葉は不適切であるとして、菌寄生植物という表現に切り替える動きが強くなってきている。

腐生植物に限らずとも、世の中の多くの植物、特に樹木は、根で特定の種類のカビやキノコと共生している。どのような共生かという、植物側が光合成で作出した炭水化物をカビやキノコに与える代わりに、カビやキノコの側は、植物の根では吸収・摂取が難しいミネラル分を植物の根に与えるのだ。もちろんこうした共生関係がなく、自由生活をしているカビやキノコたちもある。しかしそうした種類のカビやキノコでも、その栄養源はやはり森から出る枯れ枝や枯れ葉、あるいは生きた植物を攻撃して枯らして得るものだ。つまり森全体として、植物とカビやキノコは、一体となった栄養循環を行っているのである。



▲図1-2 森をめぐる資源連鎖

逆に栄養分を吸い取ってしまう。そのカビやキノコの栄養源は、上記の通り森が稼ぎ出したものである。ということは、腐生植物はカビやキノコといった菌類を介して、森を食べているということができるだろう（図1-2）。

森をめぐる資源連鎖。腐生植物たちにとって、緑の葉を持って太陽光を浴びる必要がなく、カビやキノコから栄養をとれば良いということは、すなわち一生のうちの大半を地下で過ごすということだ。そのため目撃される機会も少ない。腐生植物は、謎の宝庫でもある。

その腐生植物の謎の詳細は、先日書いた腐生植物の入門書『森を食べる植物～腐生植物の知られざる世界』（塚谷裕一、岩波書店）を見ていただくとして、今回はその腐生植物たちの具体例を示しつつ、他の植物に見られないその不思議な形についてご紹介しよう。

森全体として、植物とカビやキノコは、一体となった栄養循環を行っているのである。ところが腐生植物は、こうした関係をいわば悪用し、根に入ってきたカビやキノコに炭水化物を与えるどころか、むしろ

塚谷裕一（つかやひろかず）
1964年生まれ。1993年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、博士（理学）、東京大学分子細胞生物学研究所助手、自然科学研究機構 基礎生物学研究所助教授を経て、東京大学大学院理学系研究科教授（現職）。放送大学客員教授、自然科学研究機構、岡崎統合バイオサイエンスセンター客員教授を併任。著書に『植物の心』（岩波新書）、『スキマの植物図鑑』（中公新書）、『変わる植物学 拡がる植物学』（東京大学出版会）などがある。



▲図1-1 タヌキノシヨクダイ

与えるどころか、むしろ

PISAやTALIS 調査から見える日本の教育の現状と課題 (第5回/全5回)

今後の改革の方向性(2) 高大接続の改革など



目白学園 理事長
尾崎 春樹

変革していく社会で必要とされる資質能力を直視し、生徒本位の教育を充実するには、高校教育・大学教育の改革と高大接続の改革を一体として進める必要がある。

6. 高等学校基礎学力テスト (仮称) の導入

前回述べた教育内容の改善やアクティブ・ラーニング型授業への改善に加えて、教育の質の確保・向上を図り、生徒の学習改善に役立てるため、「高等学校基礎学力テスト (仮称)」の導入が検討されている。

これは、高校生が身に付けるべき基礎学力の定着度を把握し提示できる仕組みを設けることにより、主として平均的な学力層や底上げが必要な層を対象に、学習意欲の喚起や学習の改善、指導改善に生かして高校教育の質の向上を図ろうとするものだ。

高校の新教育課程は平成34年度から年次進行で実施されるため、35年度に2年生になる生徒から新指導要領対応のテストの対象となる。このため31年度から34年度までは、現行指導要領下で、国・数・英の3教科(国語総合・数学I・コミュニケーション英語Iをレベルの上限)で実施することが想定されている。この期間は試行期間ゆえ、大学入試や就職に用いられる予定はない。

35年度以降の対象科目は新指導要領の必修科目が基本になる。大学入試や就職への活用方策は未定で試行の実施状況を見ながら今後検討される。

7. 大学入学希望者学力評価テスト (仮称) の導入

さらに、大学入試で特に「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するため、大学入試センター試験を廃止し、「大学入学希望者学力評価テスト (仮称)」を導入することも検討されている。

これにより、高等学校での能動的学習の充実を後押しするとともに、入学後の大学教育に円滑につな



げていこうというものだ。

34年度入学の生徒が3年生になる36年度から新指導要領対応となる前提で、対象科目は32年度～35年度は国語・数学、36年度以降は必修科目の「歴史総合」や新選択科目「数理探究」など新指導要領の科目設定に対応したものとそう。

多肢選択式に加え記述式問題が導入される。多肢選択式は複数教科に関わる問題や複数正解がある問題など。記述式は、作問や採点の体制の整備が欠かせず実現までは紆余曲折がありそうだが、32～35年度は短文記述式、36年度以降はより文字数の多い問題が想定されている。

当初懸案だった年複数回実施は、高校教育に与える影響への反発もあり、また記述式の導入によって多面的・総合的な評価が相当程度可能になることも踏まえ、見送られる公算が強い。

結び

PISA 調査に見られるように、これまでは財政支援が不十分でも教育現場の奮闘によってわが国は世界トップクラスの教育水準を誇ってきた。しかし TALIS 調査でわかるように、これも限界に近い。日本が世界に誇る教育水準を維持しさらに強化するには、教育現場の改革に留まらず、研修など教員の専門性の向上のための支援、真のチーム学校の実現や教員養成の見直しなど行財政面の支援が欠かせないことを忘れてはならない。

イラスト ひらた ゆうこ www.pastelboat.com

第14回

地球となかよしメッセージ

作品発表の
お知らせ

「第14回 地球となかよしメッセージ」入賞作品は
『Educo』2017年冬号(2017年1月下旬発行予定)
で発表します!

昨年度の入賞作品は、教育出版ホームページでごらんいただけます。

「地球となかよし」という言葉から感じたり、
考えたりしたことを、
写真やイラストにメッセージをつけて表現する
「地球となかよしメッセージ」。
今年度も、すばらしい作品が集まりました。



『Educo』バックナンバーについてはお問い合わせください。

ことばと絵のカルタは「先人からの贈り物」

奥野かるた店 会長 奥野伸夫 さん 代表取締役 奥野誠子 さん

大正15年創業、国内唯一のかるた専門店

社長 大正15年に、西新橋で祖父が店を起したのが奥野かるた店の始まりです。囲碁、将棋、トランプなどの問屋から始まり、戦争中に疎開・移転した後、昭和27年に神保町に開店、現在の場所です。小売業も始め、自社商品も徐々に増え始めました。

会長 大正時代はトランプや百人一首などを扱っていましたが、子ども用カルタを扱うのは年々減っていった。当時はキャラクター商品がなかった。各社がいろいろな「いろいろカルタ」を出してました。京都・大阪・東京では「犬樺かるた」の内容がやや異なります。例えば東京で「いぬもあるけは ぼうにあたる」と書かれている札は、京都では



「いっすんさきは やみのよ」です。特にレベルの高かったものは、童画家、武井武雄さんの絵の入った「犬樺かるた」でした。昭和一桁の頃のは、昭和50年代にほとんどなくなっていました。ある時、武井さんのご家族の方が、武井さんの絵の入った「幼児標準カルタ」を譲ってくださったので、復刻することができました。

遊びながら学べる「かるた」の魅力

社長 製品の企画・制作は、主に会長、また私がしますが、オリジナルカルタの制作を希望される、個人のお客様も結構いらつしやいます。まずご希望を伺い、制作可能な場合は費用をお伝えしてご相談に応じています。また、当社の企画の一例ですが、「宮沢賢治 木版かるた」や「東海道中膝栗毛かるた」などがあります。新聞の人気連載コラムをヒントにカルタを作ったことでもあります。

それぞれのカルタには、いろいろなエピソードがございます。例えば「復刻版 おさかなカルタ」は、新聞に「近年、築地の仲卸（なかおろし）の社長宅に奇跡的に1つあったのを発見される」という記事を見つけた会長が、そのお宅に伺って復刻が実現しました。またある時、私は「暮らしの手帳」300号記念号に、文字だけの「お料理カルタ」が載っているのを見つけました。「料理について、とても大切なことが描いてあるな」と思い、カルタに絵が付いていないかを「暮らしの手帳」の

社長にお尋ねしたら、「絵はない」と。そこで、カルタの語句を描いた中江百合さんのご遺族を紹介していただき、2004年に「お料理カルタ」を作りました。

会長 一般的に小さいお子さんが選んでくださるカルタは主にアニメキャラクターものですね。去年は「昔のことわざを皆さんに覚えていただく」と、NHK Eテレの「にほんごであそぼかるた」を作りました。大人も子どもも、遊びながらいろいろなことを学べるのが、カルタの魅力のひとつだと思います。

ことば・噺を楽しむ催し

会長 今年の1月から、毎月、第1木曜日に「神保町かるた亭」として、当店の2階で落語会を開いて、「二つ目」（寄席のプロログラムで2番目に高座に上がる人）の方が来てくださいます。真打ちになろうと頑張っている若手の噺家さんたちはとても熱心で、毎回楽しみにしてください。皆様たちもいらつしやいます。

社長 「いろいろな方に、この店を通してかるたの楽しみ、言葉の楽しみを知っていただきたい」と思って始めた寄席ですので、多くの方に知っていただけたらと思っています。会長 かるたは、言葉と絵の響きあうもの、「先人からの贈り物」です。皆で楽しみながら、学べるのがたくさんあるんですよ。

奥野伸夫（おくの のぶお） 1930年東京都生まれ。奥野かるた店会長
奥野誠子（おくの ちまこ） 1960年 神奈川県生まれ。奥野かるた店社長
◆ <http://www.okunokaruta.com/info.html>

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆ 新井紀子先生の「2030年までに多くの仕事がロボットに代替される。教育をどうすればいいの、一刻も早く考えなくては」という話は、極めて現実味のある警告として教育関係者は受け取るべきであろう。（福岡県 武末正史）
- ◆ まず教科書を読む子に——小・中・高の教育現場での基本的事項の指導徹底の重要性を改めて感じました。（埼玉県 石川正夫）
- ◆ 尾崎春樹氏のコラム、簡潔にまとめられ、大変よく理解できた。（北海道 富田俊之）
- ◆ 「ほっとな出会い」、浅井さんのお話に感銘をうけました。今の子どもたちにとって「食べ物、作らないと食べられない」ことを知るの重要だと思います。（埼玉県 阿由葉晃市）

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進歩や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。